

Title	言語文化学 Vol.9 編集後記
Author(s)	藤本, 和寛夫
Citation	大阪大学言語文化学. 9 p.286-p.286
Issue Date	2000-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78041
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集後記

創刊号以来、久しぶりに本誌の編集にたずさわることになり、いくつかの感想をもった。本誌は「大阪大学言語文化学会」の機関誌であり、雑誌の刊行はあくまでも学会活動の一部ということになっている。しかし、委員会の活動が雑誌の編集に手をとられすぎ、しかもその労働の負担が助手の皆さんに集中しすぎていると感じた。投稿論文に対するレフリー制をとっているため、主たる投稿者である院生諸君から選出されている委員が働きにくいといった点もある。今回、編集委員全員が責任をもつという本来の体制に一步近づける努力をし、そのおかげで刊行も本来の3月末に近づけることができたように思う。査読担当者、編集委員の皆様感謝したい。

今回は、投稿希望を受け付けた段階であまりにも希望者が多かったため、異例のことではあるが、昨年論文を本誌に掲載された方には、あらかじめ掲載ができない可能性が強いので、他の雑誌への投稿を考えていただくようお願いし、ご理解を得た。深謝したい。なお、編集委員会では今後も同じことが起こる可能性があるので、次号からA4版に変更し、掲載論文数を増やせるようにすることにした。また将来は年2回刊行といったことも検討する必要があるかもしれない。

学会活動においては、昨年から年2回の大会の内の1回を土曜日に開催することとした。すでに多数の会員が、言語文化研究科から離れた場所で活躍されており、今後は、できるだけ多くの学会員に出席していただけるような開催日の設定に努力したい。

今回の執筆者は、ご覧のとおり全部言語文化研究科の現役の院生及び修了生の諸君の論文となったが、教官の会員にも門戸は開かれている。言語文化が成り立つか成り立たないかといった議論を外野席とするのではなく、どうか本誌でまともに議論していただきたい。編集委員の一員としては、そのほうが雑誌の売れ行きも良くなり、財政的基盤の強化にも役立つのではないと思うのだが。(藤本)

2000年3月
編集委員会

編集委員

藤本和貴夫(委員長)、中埜芳之、坂内千里、三藤 博、渡辺秀樹
高木佐知子、板東美智子、堀井祐介、宮西久美子
赤阪友紀子、北山 誠、張 修慎、服部圭子、森本郁代